5－2　内箱　正面　修理後

5－1　内箱　正面　修理前

5－4　内箱　左側面　修理後

5－3　内箱　左側面　修理前

5－6　内箱　右側面　修理後

5－5　内箱　右側面　修理前

口絵5　春日龍珠箱(奈良国立博物館)　内箱(1)

6－2　内箱　背面　修理後

6－1　内箱　背面　修理前

6－4　内箱　蓋天面　修理後

6－3　内箱　蓋天面　修理前

6－6　内箱　蓋裏面　修理後

6－5　内箱　蓋裏面　修理前

口絵6　春日龍珠箱（奈良国立博物館）　内箱(2)

7－2　外箱　正面　修理後

7－1　外箱　正面　修理前

7－4　外箱　左側面　修理後

7－3　外箱　左側面　修理前

7－6　外箱　右側面　修理後

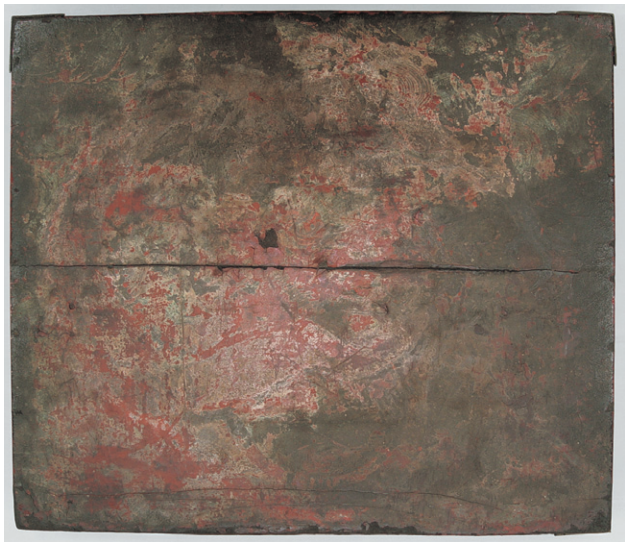
7－5　外箱　右側面　修理前

口絵7　春日龍珠箱（奈良国立博物館）　外箱(1)

8－2　外箱　背面　修理後

8－1　外箱　背面　修理前

8－4　外箱　蓋天面　修理後



8－3　外箱　蓋天面　修理前

8－6　外箱　底面　修理後

8－5　外箱　底面　修理前

口絵8　春日龍珠箱（奈良国立博物館）　外箱(2)

―修理報告―

奈良国立博物館所蔵　春日龍珠箱の保存修理

北村昭斎
荒木臣紀
清水健

修理年度　平成十五・十六年度
事業者　奈良国立博物館
修理施工者　北村昭斎、株式会社文化財保存

はじめに

春日龍珠箱は、室生寺伝来と伝えられる木製、漆塗、彩絵の箱である。現在内箱、外箱の二合一具が伝えられており、龍珠すなわち如意宝珠を納めたものとされている。本品は平成十二年度に文化庁より管理換され当館の所蔵となったが、以前から表面の汚損や剥落が目立つことが懸案となっており、奈良国立博物館の費用にて本格的な修理が行われることとなった。

修理に当たっては、奈良国立博物館の監督の下、漆部分を北村昭斎（選定保存技術保持者・漆工品修理）が、彩色部分を株式会社文化財保存（選定保存技術保存団体・国宝修理装潢師連盟加入）がそれぞれ施工し、二箇年を要して作業が進められた。

本稿では修理の概略について、作品の概要、修理前の状況及び総括を奈良国立博物館・清水健が、修理の概要を、実際に修理に当たった北村昭斎、株式会社文化財保存・荒木臣紀がそれぞれ分担して、報告するものである。

一、作品の概要（口絵5～8）

本品は、内箱、外箱の二合一具になるいずれも木製の箱で、内箱が外箱にすっぽりと収納される二重箱の形式を採っている。内箱は、被蓋造で、針葉樹の柾目板を相欠（あいがき）に組み、釘で留めて形作っている。表面は木地に粗目の麻布で布被（ぬのき）せし、黒漆の下地を施して朱漆を塗り、その上から彩色で描画を施している。蓋側面の上辺及び身側面の下辺四隅には金銅製隅金具を据え付け、補強している。外箱も、被蓋造で表面木地上に布被せし、黒漆の下地を施した上で朱漆を塗り、彩色を施す点は内箱同様であるが、身の底に桟を渡して脚とし、金銅製肘壺金具を背面二箇所に付け、正面には海老錠を掛けるための金銅製金具を蓋身にそれぞれ打っており、唐櫃風に仕上げられている。また底面には紐をかけるための孔が前後二箇所に開けられ、

蓋側面の上辺及び身側面の下辺四隅には金銅製隅金具が、桟脚には金銅製沓金具がそれぞれ取り付けられている。

内箱・蓋表には海中の岩座に立つ八大龍王が鬼形で左右に分かれて表され、波間には孤舟もみえている。蓋四側面には蓋表に続くと思われる岩礁、波濤が表され、身の四側面に表された滔々と逆巻く波濤へと連続した画面を構成している。蓋裏には蓋表と同様荒波の中に立つ岩坐上に左右に分かれて七体の鬼形と一体の童子形が描かれている。いずれも宝珠を持すことから、蓋表同様八大龍王を表したものと推測される。内面は全面に朱漆が施されている。

一方、外箱に目を転ずると、蓋表には損傷著しいものの、宝珠を握った龍が海中から立ち上る様が表されており、蓋の四側面には中央に寄せて三箇の宝珠が配されている。また蓋裏には海中の岩礁上に立つ八人の束帯姿の人物が描かれている。彼らの肩にはそれぞれ龍が乗っており、この八人も八大龍王を表したものと推測される。蓋裏の左右の上端にはそれぞれ風神・雷神が、下部には逆巻く波濤の中に宝珠を持した三頭の龍が表されている。加えて側面は、背面のみは朱漆塗のみで彩絵を施さないものの、他の面には春日四所及び若宮にちなんだ図様が展開する。順にみてゆくと、正面は中央に大きな欠失があるものの、春日山を背に向かって左に鹿に乗り黒袍の束帯を身につけた男神と十二神将が、右には鹿に乗った童形神が司禄・司命と十王を従えて影向する様を表している。男神は薬師如来を本地とする二宮の祭神・経津主命（下総香取神）、左の童形は地蔵菩薩を本地とする三宮の祭神・天児屋根命（河内枚岡神）と推測される。天児屋根命は僧形で表されることが多いが、『春日権現験記』巻四第二段には童形の天児屋根命が登場しており、「子神」として童形に表されることもあったようである。[1] 向かって左側面は鹿に乗った束帯姿の武官が十二天を従えて影向する様を表し、釈迦如来（あるいは不空羂索観音）を本地とする一宮の祭神・武甕槌命（常陸鹿島神）を描いたものと思われる。右側面には、鹿に乗った女神と童形神を山水景観中に配し、周囲に円相に収まる十二宮を表している。女神は十一面観音を本地とする四宮の祭神・比売神、童子形は文殊菩薩を本地とする若宮を表したものと推測される。星宿について説く『宿曜経』は、文殊菩薩の所説とされており、あるいは十二宮は文殊の眷属に当たるかと推測される。[2] 外箱の内面は、内箱同様全面に朱漆が施され、神秘的な趣を呈している。

外箱に内箱が収納されていたと思しく、内箱の方が全体に保存状態が良好で、欠損部分は少ない。また、外箱背面が大きく破損しているのは、景山氏の指摘するように本品が厨子のように宝珠を内包し、一定の場所に背を壁などに接して安置された可能性を示している。[3] このほか蓋裏に描かれた彩絵は、鮮やかな色彩を残しており、制作当初の華麗な様を彷彿させる。

なお、修理後の法量は以下の通り。

法量　〈内箱〉　蓋　幅三八・六　奥行三七・六　高五・三
　　身　幅三七・一　奥行三五・七　高三六・七
　　深三五・五
　　総高三七・八
　〈外箱〉　蓋　幅五二・〇　奥行四四・七　高五・五
　　身　幅四九・〇　奥行四一・七　高四二・七
　　深三八・九
　　総高四三・五

二、修理前の状況

［内箱］（口絵5・6）

身の下辺四隅に付けられた隅金具のうち、一箇所を除く三方の隅金具が欠失していた。また唯一残る隅金具にも金釘の欠失がみられた。加えて、身側面の木地組手一箇所が外れ、隙間が生じていた。このほか内側に生じた亀裂を過去に補修した際に用いられた麦漆が周辺の朱漆に固着し、印象を損ねていた。さらに全体に経年による汚損が目立ち、くすんだ印象を与えていた。

なお、内箱は比較的保存状態が良好であった。

［外箱］（口絵7・8）

随所に比較的大きな損傷がみられ、全体に美観が損なわれていた。

蓋の背面向かって左側の隅金具、背面向かって右側の肘金具、身では正面向かって右側の錠金具、背面向かって左側の桟の沓金具、身の正面向かって右側の錠金具に対応する内側の嵌金及び背面向かって左側の壺金具に対応する内側の嵌金が欠失していた。また、経年による木地の収縮によって漆塗膜及び下地に用いた麻布の浮きが随所みられた。さらに、正・背面には大きな剥落箇所があり、木地を呈していた。特に正面は一部に暗青色の補彩が施され、背面は後補の麦漆が朱漆面まで浸食し、ともに美観を損ねていた。加えて蓋の稜角、隅の部分は打痕や組手部分の破損が多くみられ、木地を呈している部分もあった。このほか底面は漆塗膜に亀裂が生じ、剥落の進んでいる部分が多く、また桟の部分も、固定のために打たれた鉄釘の周囲に錆による炭化の進行がみられた。

三、漆工部分の修理（図1～8）

イ、内箱

1、破損した木地接合部は麦漆で接着した後、下地漆を施して表面を整えた。

2、身の内側の朱漆塗膜に付着した麦漆は鋭利な刃物やリューター、微粒子の砥石などを用いて慎重に可能な範囲内で除去を行った。

ロ、外箱

1、エタノール水溶液を用いて綿棒や木綿布等にて可能な範囲で全体のクリーニングを行った。

2、漆塗膜の上に付着して固まった過去の修理の際の麦漆は鋭利な刃物やリューター、微粒子の砥石などを用いて慎重に可能な範囲内で除去を行った。

3、彩色の施されていない部分で浮き上がって反り返っている漆塗膜は、湿気を与えて塗膜をある程度柔軟にさせてから、溶剤（リグロイン）で希釈した麦漆を隙間に浸透させ、本体に負担を掛けない程度に加圧して接着した。

4、正面の大きな漆塗膜欠損面は木地肌に麻布を糊漆で貼り、さらに漆下地を施して絵画面との段差を補った。

5、背面の漆塗膜が大きく剥落した面は木地肌に生漆を拭き込み、漆塗膜断面周辺の切り立った段差を下地漆で括り、塗膜の破損がさらに進行するのを防止した。

6、打痕などによる破損で木地が露出した部分は木屎漆（こくそうし）で形状を復元した後、漆下地を施して表面を整えた。

7、底面に取り付けられた桟脚で木質部の炭化により欠損した部分は生漆を含浸させて強化した後、大きな欠損部は同様な材を用いて埋め木をし、木屎漆で形状を復元し整えた。

8、欠損した金具は同形状の物を新調し所定の場所に釘で固定した。金具には彫金を施さず、裏面に「ホ」の文字を入れた。また、鍍金の輝きを和らげて全体の違和感を軽減する為に多少の古色付けを行った。なお、金具制作は辻清氏（滋賀県指定選定保存技術者・曳山金工品修理・長浜市）に依頼した。

四、彩色部分の修理（図9～16）

1、作業のための剥落止め

クリーニングの作業を安全に行うため、ヒドロキシプロピル・セルロース（HPC）／エチルアルコール2［wt%］溶液、兎膠2［wt%］水溶液を順に塗布含浸させ剥落止めを行った。

2、クリーニング

柔らかい刷毛、ピンセットを使って埃等を除去した。エチルアルコールを含ませた綿棒や柔らかいワイプに汚れを吸着させた。

3、剥落止め

内箱

2［wt%］兎膠水溶液を絵具層各色毎に筆にて塗布含浸させ充分に剥落止めを行った。

外箱

表側：HPC 0.5［wt%］エチルアルコール溶液の塗布後、粒膠3［wt%］水溶液で剥落止めを行った。

裏側：経年劣化によって膠着力が低下し、水を与える事により彩色材料が移動してしまう危険のある絵具層、及び小口にはエチル・セルロース／酢酸エチル2［wt%］溶液で剥落止めを行った。それ以外の箇所には兎膠、粒膠（共に濃度3［wt%］）水溶液を浸透の具合を見て使い分け、剥落止めを行った。

4、浮き上がり箇所への処置

層状に浮き上がっている箇所にヒドロキシプロピル・セルロース／エチルアルコール0.5［wt%］溶液、6［wt%］兎膠水溶液を順に差し込みプレスして押さえた。

5、欠損部補填

濾紙粉をメチル・セルロースにて練った物を欠損部に補填した後、補彩をした。

6、補彩

北村昭斎の工房で旧修理箇所を除去したため木地を露出していた部分、及び当工房にて補修した箇所に補彩を施して周囲との調和を図った。

7、備考

使用材料

材料名

ヒドロキシプロピル・セルロース	東京、日本曹達社製、Mサイズ
メチル・セルロース	スイス、ラスコー社製、平均分子量15000、300
エチル・セルロース	ドイツ、アルドリッヒ社製、平均分子量86000
膠	アメリカ、アートサプライ社製、兎膠
アクリル絵具	ドイツ、シュミンケ社製
充填材（濾紙粉）	東京、東洋濾紙製

〔註〕セルロース誘導体について

エチル・セルロース、ヒドロキシプロピル・セルロース、メチル・セルロースなど、木材繊維を原料に生成される水溶性の物質。ほぼ無色透明で弱い接着力を持ち、文化財修理において同じような目的で用いられている布海苔（糖類）に比べ、微生物の繁殖、虫害が少ないという利点が言われている。欧州などでは、酸化が進み脆弱化している酸性紙の紙力の強化に使用されたりしている。また、食品にも使用されている。

修理後所見

1、彩色部分の剥落止めについて

絵具層は膠着力の低下が見られ、粉状化や鱗状化している箇所もあった。蓋の表裏、外箱、内箱など場所の違いによって膠着力の低下には差があった。例としては、外箱蓋裏の緑青や群青の箇所では、粉状化も無く物理的にも安定しているように感じられた箇所でも、極性溶媒（水等）を用いたクリーニングには不安定であった。このように様々な絵具層の状況に応じて、適した接着剤や作業方法を使い分けて剥落止めを行った。

2、絵画層の浮き上がりについて

絵画層は、厚い漆下地層が木地から浮き上がっている箇所が多く見られた。今回の修理では、浮き上がっている箇所には6［wt%］膠水溶液を注入して固い漆下地層を柔らかくした後、プレスして乾燥させ、浮き上がりを押さえた。

亀裂部分にはヒドロキシプロピル・セルロース／エチルアルコール溶液で小口の強化を行った。

五、その他

全体の修理設計は北村昭斎が行った。また保存のため、外箱と内箱それぞれを納める倹飩式、下水板付きの桐箱を北村の手配により新調した。

むすびに

今回の修理では、漆塗膜の亀裂や浮き及び絵画面の亀裂や剥落などによって、作品の取り扱いに注意を要する部分を中心に修理を行った。また金具の欠失や表面の汚損など作品本来の美観を損ねていた要素についても補填やクリーニングを行い、展示に堪えうる美観の回復に努めた。

その結果、当て傷などによって木地を露出していた部分や後補の漆によって見苦しくなっていた部分、金具の欠失によって痛々しくみえていた部分が修復され、作品の魅力がより際立つようになった。またこれまで取り扱いに際して危険を孕んでいた剥落や浮き、亀裂部分、桟の炭化進行箇所が接着、固定されることにより、より作品の安全が確保され、保存性が向上するとともに、展示に活用しやすくなった。

そして何より、欠失箇所や金具の補填により、絵画面の剥落部分はさておき、本品がある程度旧観を取り戻したことは、今後この箱の用途や制作事情の解明に資するところが大きいと考えられる。

〔註〕

（1）津田徹英『日本の美術四四二　中世の童子形』（至文堂）、平成十五年

（2）春日信仰に関係する絵画に、ボストン美術館に蔵される春日星曼荼羅と呼ばれる作品がある（二本存在する）。春日山を背景に雲に乗って飛来する北斗七星や九曜を描いたこの作品は、春日信仰と星宿信仰の結びつきを如実に示しているが、特定の祭神（本地仏）に結びつくかは定かではない。

（3）景山春樹「春日龍珠筥」（『国華』八八五）、昭和四十年

［執筆分担］

三、漆工部分の修理　北村

四、彩色部分の修理　荒木

その他の部分　清水

（きたむら　しょうさい　選定保存技術保持者・漆工品修理）

（あらき　とみのり　株式会社文化財保存・修復課主任）

（しみず　けん　当館学芸課研究員）

漆工部分の修理

図１～図８

図２　外箱　蓋角　修理後

図１　外箱　蓋角　修理前

図４　外箱　背面　クリーニング後

図３　外箱　背面　クリーニング中

図 6　外箱　底面　桟脚　修理中

図 5　外箱　底面　桟脚　修理前

図 8　外箱　金具　新補

図 7　外箱　金具　修理中

彩色部分の修理

図 9 ～図16

図10　支持体からの浮き上がり　修理後

図 9　支持体からの浮き上がり　修理前

図12　正面部分　修理後

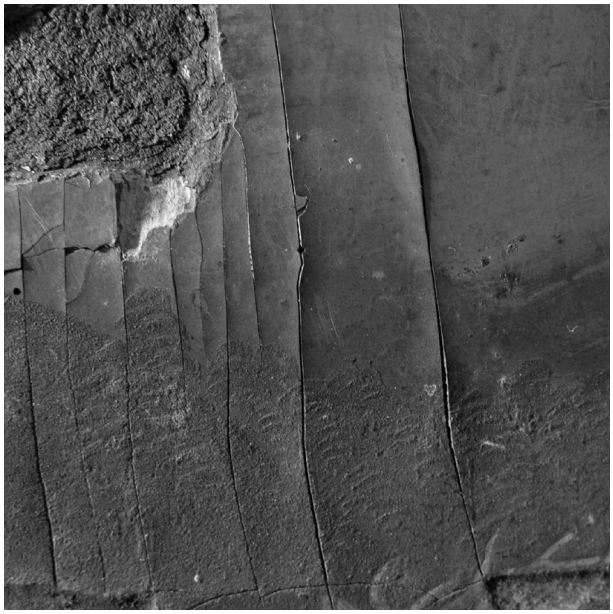


図11　正面部分　修理前

図14　外箱　正面　大欠損部　修理後

図13　外箱　正面　大欠損部　修理前

図16　外箱　正面部分　修理後

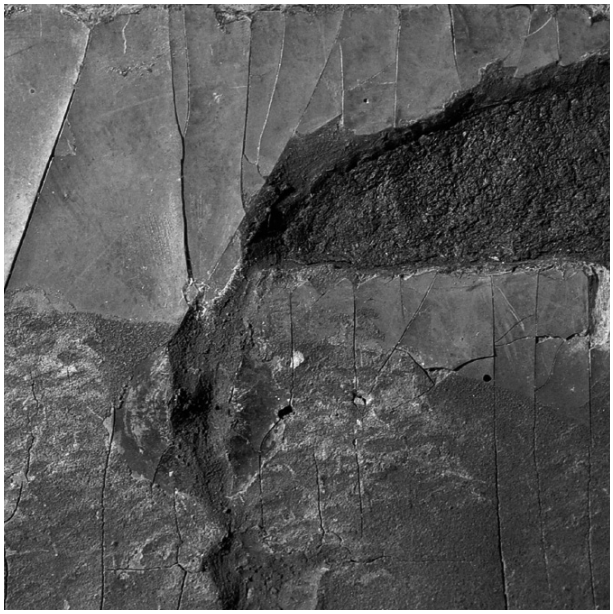


図15　外箱　正面部分　修理前

［英文翻訳］
臼井　祥子

奈良国立博物館研究紀要
鹿園雜集　第八号
平成十八年三月三十一日発行
編集発行　奈良国立博物館
〒六三〇-八二一三
奈良市登大路町五〇番地
印　刷　株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地